

開発と発起

本学専任講師 小野蓮明

念仏成仏の教えを以て一切衆生の成仏道を明らかにされたのが浄土教であるが、その念仏成仏の証しは、親鸞によれば「信は願より生ずれば、念仏成仏自然なり」と言われた如く、願より生ずる信に於て初めて言い得ることであることを明らかにせられた。信は願より生ずるということをも、「信巻」別序には、

「夫以、獲得信業、発起自、如来選択願心、開闡真心、願、彰従、大聖矜哀善巧、」

と語っている。この言葉によれば、信心とは衆生の有漏心より起す心ではなく、如来選択の願心より発起せるものであり、大聖矜哀の善巧より願彰せられるものであるという。発起とは、自己において自己を転ずる如き超越的生起を意味する言葉であろうか。和讃に「ひらきおこしたまふなり」と左訓し、又草稿本の和讃に「ひらきおこす、たちおこす、むかしよりありしことをおこすをほちといふ、いまはしめておこすをきといふ」と左訓せられている如く、信心が自己に於て生ずるものでありながら、而も自己の存在をその根底より転換せしめるような超越的生起であるということの意味する言葉であろう。如来の選択本願が衆生の信心として成就したということの意味する。願成就の信といわれるように、

願が信として成就し、信は願の成就に外ならない。

然しまた信心は最も具体的な宗教的自覚であることに於て、それは私のものであり、我々の発すものであることも否定できない。「能、発一念喜愛心」とか「信心開、発即獲忍」といわれ、更に「一念者斯願、信業開、発時烈之極、促、彰、大難思慶心、也」という。能発も開発も文字通り「開き発す」ということ、而も内より開き発すという意であろう。然らば、発起は超えて起ることであり、能発・開発は内から開き起す意であると解するならば、信心について開発といひ発起といわれる意味は何であろうか。

思うに能発・開発も畢竟「聞き開く」という意味であって、大悲願心聞き開くこと、仏願の生起本末を聞き開くことによつて、広大の仏智を獲得することであろう。「智慧の念仏うることとは、法蔵願力のなせるなり、信心の智慧なかりせば、いかでか涅槃をさとらまし」と詠われている如く、法蔵願力の徹底が信心の智慧である。信心の智慧は、我々の智慧才覚に基づくものではなくて、法蔵の願心聞き開くという願心の徹底に於て成就するのであって、これ一念の信心の内容が常に「喜愛心」とか「大難思慶心」と現わされる所以である。かくして、信について能発・開発といわれたことと発起と示されたこととは何等矛盾することではなく、願力廻向の信を内からと外からと言ひ現わされたものと解される。

二

それでは、信心とは如来選択の願心より発起するといひ、信は願より生ずるといわれるとき、その願とか願心とは何であろうか。

願とは一般に人間存在をして行為的存在たらしめている根本意志、即ち自己をして自己に成そうとする本源の意志を意味するものといえよう。然し我々衆生は、その現実相に於て根本無明に覆われていて本来の願に目覚めることなく宿業流転を重ねている。その限り、我々にとって無漏清浄の願生心の発起は望み難いのみでなく、真如法性もまた限りなく彼岸のものといわねばならない。然し曇鸞が「以知_一実相_二故則知_三三界衆生虚妄相_一也、知_一衆生虚妄_二則生_三真实慈悲_一也」と洞見されたように、一切衆生が無始以来無明海に浮沈しているが故にこそ、真如法性は自らを語り頭わさなければならなかったのである。真如法性が「従如来生」し「かたちをあらわして、法蔵菩薩となのりたまひて無碍のちかひをおこしたまふ」た所以は、真如の智慧によって内観せられた衆生の無明性にある。されば法蔵菩薩の「無碍のちかひ」とは、衆生の現存在性を異熟として荷負しようとする如来の痛みであるといえよう。それは、如来の内であつて如来を見失い、宿業によって懊悩している衆生を、本来の如の世界へ喚び帰さんとする用らぎである。従つて、その誓願の願事である「至心信樂欲生我国乃至十念」も「衆生を摂して畢竟浄に入らしめ」んという如来の大悲心そのものの表現であると言えよう。一切衆生の往生する道に於て如来が真に如来たらしとする如来の心、それが「至心信樂欲生」の三心である。されば法蔵の四十八願といつても、結局は願そのものが信を内に展開したところの一つの行であると言えよう。

如来の本願は、衆生の無明を破ることによつて衆生の業をして願の行ずる場所に転じ、以て如来は自らを莊嚴成就せんとする。

それ故に、衆生を内に超えてその宿業を荷負して実存と成そうとする法蔵の本願こそ、永劫の流転に堪え得る根源的主体であるといふ得る。衆生を目覚まし、目覚めた衆生に於て自らを成就するという本願の徳を現わすもの、それが名号即ち「南無阿弥陀仏」である。それは決して単なる名ではない。本願の言であり、本願に於て我れを喚び、我れに來れと喚ぶ言である。親鸞の名号積によれば、南無という私の帰命は如来の本願招喚の勅命であり、仏の發願廻向そのものであるという。それは、信心とは単に本願の招喚に喚びさまされた自覚というに止まらず、寧ろ如来の願心が衆生の信心として現前現成しているという領解であつたと云える。このことの厳密な確かめが所謂「信卷」の三心一心問答である。

言うまでもなく三一問答は「世尊我一心」と自督の信を一心と表白した天親の帰命の信心と「至心信樂欲生」と誓われた本願の三心とは一であるという確かめである。天親の一心は本願成就の信心であり、また本願の三心はすでに疑蓋雜わることなき故に真実の一心であるという領解である。思うにこの領解の根底には、本願に於て「設我得仏」と誓ひ出された「我」と、天親が「世尊我一心」と帰依信順せられた「我」とは、全く別の主体ではなく同一の主体でなければならぬという鋭い洞見がある。「設我得仏十方衆生……若不生者不取正覺」と一切衆生の救済を誓う大悲願心の主体である「我」は、「世尊我一心……願生安樂國」と表白せる願生心の主体たる「我」として、ここに現行現前しているというのが三一問答の主旨ではなかつたか。本願の「我」が信心の「我」として成就するのであるとすれば、一心帰命する「我」の

根源の主体は、根源の大悲願心の主体としての「我」に外ならないと云えよう。即ち、大悲願心の主体としての「我」とは「一如宝海よりかたちをあらはして」「無碍のちかひをおこしたまふ」た「法蔵菩薩」なるが故に、「世尊我一心」という衆生に發起する一心帰命の主体としての「我」も、実に「法蔵菩薩」であると云わねばならない。ここに親鸞の驚くべき透徹した眼を見る。

三

このことをもう一度先の別序の言葉に確かめて見よう。「爾者若行若信、無_レ有_二一事非_一阿_レ弥陀如来清淨願心之所_レ廻向成就、非_レ無_レ因他因有_二也_一」と、如来の願心の廻向成就の事実を闡明に語った親鸞が、別序では「獲_二得信樂_一、發_二起_一自_レ如来選択願心_一」と言われたのである。信心は私の上に成就する限りに於て獲得であり開發であるが、しかし私に獲得された信心は私を超えている、私を超えたものが私に発る、換言すれば、私を超えたものが私に名告り現われて「私」として成就すること、それが獲得即發起である。そのことを「自」の言がよく示している。「自」とは自性のことで、ものがもの自身から性起すること、即ち如来が如来の自性を失わずして衆生として成就すること、即ち如来が如来の自性を失わずして衆生として成就することを意味する。もし変化したり或は体が別であるならば、それは異熟であつて真の因果ではない。真の意味の因は果になる因であつて、因果の体は別であつてはならない。願と信もその区別は決して体に於ける区別であつてはならない。如来選択の願心が願心として衆生に發起し成就したのが信心である。信心とは、如来が如来自身をその

如来性を失わずして衆生として成就することであるが、実はそのこと自体が如来自身の成就でもあるのである。従つて信心とは、我々からいえば信心を獲得するというが、如来からいえば如来性起である。願としての如来が信として成就するのである。かくして信は、如来の成就を意味すると同時に、本来的自己実存の成就、「一人」の獲得を意味するものと云える。

而してまた衆生に於ける本願の信の發起は、現実には必ず釈尊の教説との値遇を縁として發起するが故に、「開_二闡真心_一、顯_二彰_一從_二大聖矜哀善巧_一」といつて信の縁起を示している。獲得信樂は如来性起であるが、その性起は同時に縁起である。「從」は信心獲得の縁起を現わしている。

かくして別序の言は、廻向という言葉を用いずして信の廻向性をよく頭わし、廻向成就という根源的事実を内からと外からと頭わした言であると云える。そしてこの一句は、本願成就文の「聞其名号信心歡喜乃至一念至心廻向」という願成就ということの根源的事実の親鸞の領解であつたとも云えよう。